

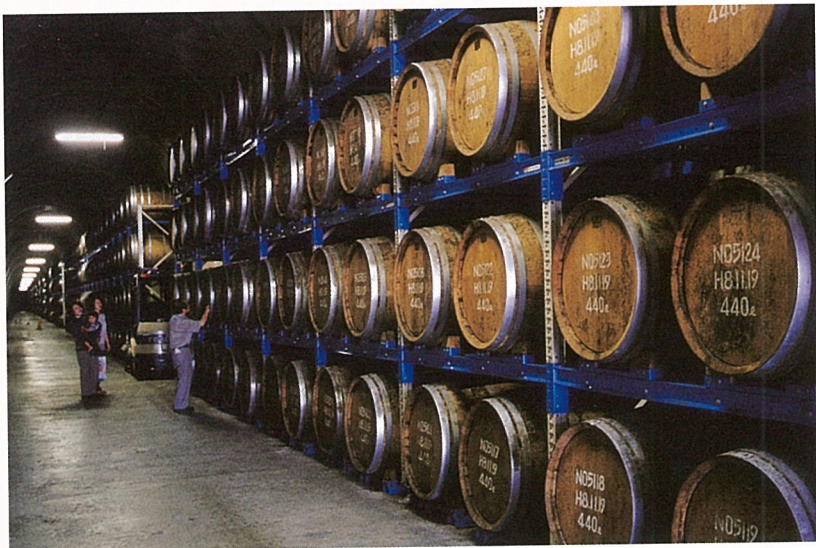
## ●町おこしの起爆剤に

観光立町を掲げた高千穂町のキャッチフレーズの一つが「焼酎のまち・高千穂」。町内に四つの酒造場があることから、この呼び名が生まれた。

焼酎のまちのシンボルになっているのがトンネルを利用した酒蔵。トンネルは旧国鉄（現JR）時代の遺産で、熊本と本県を結ぶ九州横断鉄道建設を途中で断念、放置されたままになっていた。そこを長期貯蔵専用酒蔵に活用した。ここでは今、酒だるが天井から淡いライトを浴び、長い眠りにについている。

酒蔵に変身したトンネルは三本。いずれも鉄道を延長するはずであった高千穂町と熊本県高森町間の国道325号沿いの上野地区にある。

町の中心部に近いのが「トンネルの駅」の酒蔵。市街地から北西へ車で約五分、宮崎交通「坂の下バス停」のところにある。二〇〇〇（平



トンネル内に貯蔵された酒だる。見学コースもある

成十二）年八月、岩戸の神楽酒造が焼酎長期貯蔵専用として開設した。

全長千五百十五メートルの内部には、入り口付近から四百四十メートル入りの檜（かし）だるが、四段構えで整然と積み重ねてある。高さ六メートル、幅四・八メートル。ここには酒だる五千、かめ千本、一升瓶で十万本の貯蔵能力があるという。

一九九四（平成六）年仕込みの原酒（約四五度）から年次に積み上げた酒だるは、通が見立ててオーナー制も実施中だ。内部には見学コースもつくられ、トンネル前の広場は、大型バスの駐車場や売店などが整備され、地元の人おこしグループが春秋にイベントも開いている。

このほかの二つの酒蔵トンネルは、雲海酒造が活用している上野川右岸から西へ千三百六十メートル、別の三百メートルの二本。これも長期貯蔵が目的である。

これらはいずれも高千穂町が旧国鉄清算事業団から買い取り、酒造メーカーと賃貸契約を結び、倉敷料が支払われている。

高千穂では今も夜神楽や春秋の例祭にはお神酒が供えられ、人々は豊穰（ほうじょう）祈願と感謝の酒に酔う。トンネルが醸し出す焼酎が出回るようになれば、河内の「暁酒造」、押方の「高千穂酒造」の焼酎とともに、「焼酎のまち・高千穂」の活性化に一役買うのは間違いない。

町にとってお荷物だったトンネルが生まれ変わった。神話の時代の岩戸開きならぬ、平成の町おこしの起爆剤となるかどうか。酒蔵トンネルに注目が集まっている。

確井哲也